



第九十六号

## 箏曲の展望

メルマガnoichi96号、今月は令和時代に思う「箏曲の展望」。  
新時代への決意新たに、雅楽之一が所感を述べます。



令和元年最初のメルマガ《noichi》ということで、新時代の箏曲の展望を思い、思うがまま書くことにします。

古典芸能の前途が危惧されて久しいですが、圧倒的な人気に支えられてきた箏曲の世界、いわゆる「おこと」の分野も例外でなく、運営の在り方を見直す時期に入っています。戦前から婦女子の嗜みとして浸透していった「おこと」は昭和末期に隆盛し、またそのジュニア世代が親に倣い、急速に愛好家を増やしました。また、明治から大正にかけて導入された家元制度も受け皿の役割を果たし、楽譜の普及、免状制度の正当化、楽器編成の拡大、時代の潮流に乗りながら各会派が礎を築きました。時勢に伴い、音楽も変化しました。昭和三十年代から「現代邦楽」という新しい概念が生まれ、伝統の枠に囚われない自由な発想で音楽が発展していきました。この時代、世界では音楽史に残る前衛作品が次々と発表されましたが、和楽器にも挑戦的な作品が多数生まれました。「現代邦楽」は、楽器の可能性を広げるだけでなく、技芸の向上、芸能発展に大きく貢献しました。

時代が平成となり、和楽器にも垣根がなくなつて、洋楽器をはじめとする他ジャンルとのコラボレーションが活発になりました。作曲や編曲にも工夫がなされ、アカデミックな作品からポップなものまで、今日の専門家は、どんな要望にも応えられるほどにまで進化を遂げています。

案じられる古典芸能の前途についても書いおきます。現代における古典芸能の大きな問題点、それはズバリ少子高齢化です。これは、日本の人口が減少しているから…という単純な理由ではない気がします。根本にある原因は二点、趣味の多様化、若い人の趣向の変化にあると私は考えています。若い人の関心を引き、しかも長く続けてもらうためには、色々と研究の余地がありそうで



す。追い風もあります。日本に滞在する親日外国人の増加、京都をはじめ若い層に再注目されている「和」の心、健康寿命が延び、元気なお年寄りが長く趣味に携われることも明るい話題の一つです。時勢の材料をどう関連させ、どう取り込んでいけるかが対策のヒントになると思います。なにしろ、若者が入門しないことには芸能の未来はありません。各世代が知恵を出し合い、一丸となって臨みたいところです。

以上、改まってつらつら書きましたが、このように整理してみると、自分の程度が知れます。

まだまだ力不足だと再認識する次第であります。箏曲の普及、正派の発展は私のライフワークそのものであります。私の場合は芸の鍛錬という基本軸がブレては元も子もないので、技芸の実績を積み上げながら、経営のイロハを学び、応用していければと思います。

趣旨のぼやけた文章で失礼しました。今月のメルマガとしてお届け申し上げます。

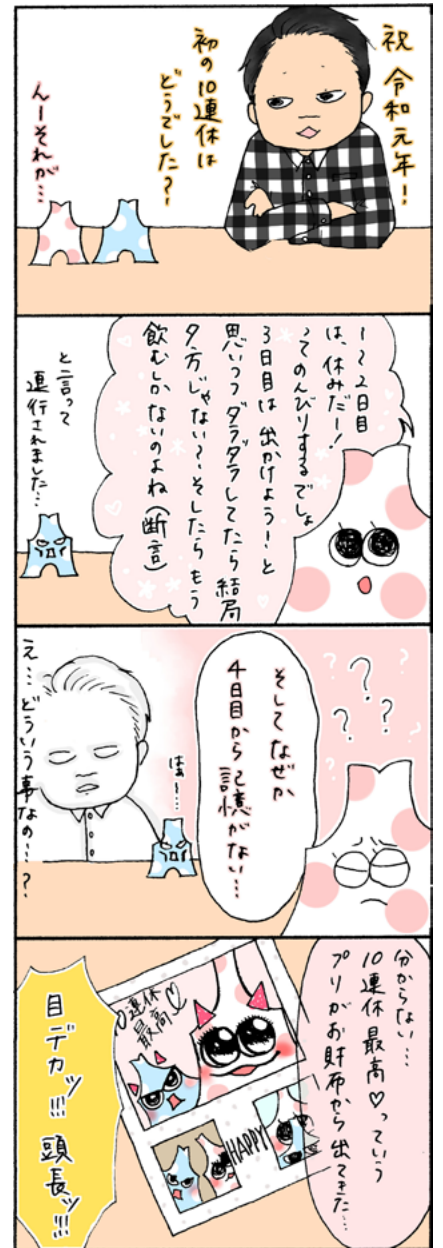


Illustration: morimoe

◎あともぎ◎

平成から令和の時代になって、世の中だけでなく、自分のまわりも急激に変化していると感じている。特にここ数年はいろいろな区切りになっていて、二十年続いた仕事の担当者が変わったたり、二十年くらい前に知り合った親しい人が田舎に引越すことになったり。伊勢神宮の本殿は二十年に一度遷宮があるし、もしかしたら世の中には二十年周期というものがあるのかもしれない。

少し前に親戚の用事があったて、京都に行ってきた。一緒にいった人たちの付き合いで、はじめて仁和寺(にんなじ)に行ってみた。建物は家光の時代のものだから、あまり古くないなど感じた後に、あれ待てよと思った。家光の時代だから古くないというのは京都の時間感覚だ。普通だったら家光の時代の建築は十分古い。京都の年配の人は、いまだに関東に行くことを下ると言うし、天皇も東京に貸しているという感覚だそう。そう考えると、ここ二十年の変化くらいで戸惑っていたら恥ずかしい。AIの進歩で、これからの二十年の変化は想像を絶するものになるだろうが、できれば京都みたいな時間感覚で悠然と世の中を眺めていたいものだ。

グラフィックデザイナー (http://www.1938.jp) みやはらたかお

